

## 若い世代の飲酒経験とその意味づけの形成過程

Alcohol-Drinking Experiences Among the Young Generation and the Process by which They Give Meaning to Such Experiences

著者名

滝口沙也加<sup>1)</sup>, 清野誠喜<sup>2)</sup>Sayaka TAKIGUCHI<sup>1)</sup>, Seiki KIYONO<sup>2)</sup>

所属・学群

1) 宮城大学食産業学群, 2) 昭和女子大学食健康科学部

1) School of Food Industrial Science, Miyagi University

2) Faculty of Food and Health Sciences, Showa Women's University

## 【キーワード】

若い世代, 飲酒, 意味づけ, 複線径路等至性  
アプローチyoung generation, drinking, sense-  
making, Trajectory Equifinality  
Approach(TEA)

## 【Correspondence】

滝口沙也加  
宮城大学食産業学群  
takiguchis@myu.ac.jp

## 【Support】

本研究は公益財団法人たばこ総合研究セ  
ンターの助成を受けた。

## 【COI】

本論文に関して、開示すべき利益相反関  
連事項はない。

Received 2024.05.31

Accepted 2024.09.02

## Abstract

This study aimed to clarify the temporal process by which young generation (aged 29 to 39) have alcohol-drinking experiences and give meaning to such experiences. Drinking experiences were compared between regular drinkers and people who rarely drink. This comparison yielded two findings.

First, lifestyle changes accompanying the transition into the adult workforce influence the entrenchment of young generation's drinking habit. Two factors explaining drinking patterns were identified: When young generation drink at increasingly frequent intervals, they become increasingly amenable to solo-drinking. However, when young generation drink less frequently over time, they become more aware of non-drinking companions.

Second, the results suggest that young generation give meaning to the experiences as follows: They initially perceive drinking as a life experience. Over time, they start perceiving drinking as an occasion in which they are conscious of their drinking companions, and then start perceiving it as an opportunity to make new friends or as an occasion to enjoy time alone. A different pattern was observed among young generation who now rarely drink: After giving meaning to their drinking experiences, they perceived drinking as an occasion where they drink a moderate amount in company. Thus, perceptions of drinking vary by time: the meaning people give to drinking develops in the course of regular drinking.

背景と目的

わが国における酒類の販売(消費)数量は1992年をピークに減少傾向にある(国税庁, 2023)。また, 厚生労働省(2019)によると, 飲酒頻度としては, 「ほとんど飲まない・やめた・飲まない(飲めない)」計(55.1%)が「月に1日以上」の割合(44.9%)を上回り, 人々にとって「飲酒しない」という選択が日常化している。とくに20~30代(総数)の「ほとんど飲まない」計は他の年代に比べて高く, 若い世代ほど飲酒習慣の定着がなされていない状況にある。

若い世代の飲酒に関するこれまでの研究としては, 飲酒行動や意識といった実態分析を中心として, 大学生(笠巻, 2012)や妊婦(早狩ら, 2015), 女性(山川, 1991)を対象に, ライフイベントや対人関係, 居住環境といった視点から飲酒行動との関連要因を定量的に明らかにする分析がなされてきた。しかし, 多くが問題飲酒を中心とした研究となっており, 一般的な飲酒行動を分析とした研究は取り組まれていないのが実情である。

飲酒といった嗜好性は人々の日常生活の中で形成されるため, 経験という時間的経過の視点から若い世代の飲酒行動を把握する必要がある。つまり, 前述したように, 現代の若い世代における飲酒習慣の定着がみられない状況をふまれば, どのような過程のなかでどういった変化が生じ飲酒習慣の定着がなされるのか(否か), 行動と意識との関係性についてプロセスの視点から把握し, 若い世代の一般的な飲酒行動を理解することが重要となる。

一方, 飲酒動機については, 測定尺度が海外の先行研究をもとに考案されていること, そして研究者によって因子構造が異なるなどにより一貫した見解が認められていないこと, 等が指摘されている(岡田, 2018)。つまり, 今後の研究のうえでも, わが国における人々の飲酒経験への丁寧な理解が求められている。

以上, 本研究では質的研究というアプローチにより, 若い世代がどのような過程を経ることで飲酒習慣の定着がされるのか(されないのか), 飲酒経験と飲酒に対する意味づけについて時間経過をふまえて明らかにすることを目的とする。なお, 本研究では嗜好性としての飲酒行動に注目するため, 問題飲酒などの特殊な状況下ではなく日常生活における人々に注目し実態を捉える。

方法

1. 調査方法

質的研究の報告に関する統合基準(Tong et al., 2007)にもとづき, 本研究における調査概要をまとめると表1の通りである。

表1 調査概要

項目	本研究における対応	
研究チームと再帰性	個人の特徴	インタビューは質的調査を専門とする民間会社で飲酒等の嗜好性に関する消費行動のインタビュー経験がある第一著者(女性)が行った。
	参加者との関係	協力者に研究の目的や内容を詳しく説明するとともに, 参加は自由意思を尊重する旨を伝え同意が得られた上でインタビューを行った。
研究デザイン	理論的枠組み	複線経路等至性アプローチ(TEA)を用いた。
	参加者の選択	(株)ドゥ・ハウスのアンケートモニターより, 条件に合致し調査協力の同意が得られた協力者を12名抽出した。
	データ収集	インタビューは2022年8~9月にオンライン上で1人の協力者につき約90分行った。内容は許可を得てICレコーダーに録音した。インタビューガイドは「幼少期を含む, 初めて飲酒する前の頃」「初めて飲酒した頃」「初めて飲酒した頃から現在に至るまで」のそれぞれにおける行動や心情を質問する内容で構成した。そして, インタビューガイドは事前に協力者へ共有したうえでそれに沿って質問を行った。
分析	データ分析	TEAの調査方法に精通し質的調査の実務経験のある専門家または研究者の3名(男性2名, 女性1名)で行った。具体的には, 次の手順を分析者全員の合意が確認されたうえで進むように行った。①インタビュー内容から逐語録を作成し, 逐語録からデータの意味内容のまとまりを切片化し抜き出した。②協力者それぞれの内容を時系列で並び替えた。③協力者間で類似の内容をまとめ, その内容を表現するような見出しをつけた。そのうえで, 現在の飲酒状況を焦点化し, そこへ向かうように分岐していく個人の選択や意思決定を複線経路等至性モデル(TEM)と発生の三層モデル(TLMG)の枠組みにもとづき図に可視化した。

資料: 筆者作成。

本研究では, 飲酒習慣の定着に至るプロセスに注目するため, 飲酒経験者を協力者とした。そ

して、現在の状況として「習慣的にお酒を飲んでいる」もしくは「ほとんどお酒を飲んでいない」という2つの属性を抽出し、前者を「継続者」、後者を「中止者」と定義したうえで、それぞれを比較しながら飲酒経験の特徴を分析した。協力者は、首都圏在住で学生を除く30歳前～30歳後半の有職者12名で、リサーチ会社（株）ドゥ・ハウス）所有のリストから抽出した（表2）。現在の飲酒頻度としては、継続者は週に2日以上、中止者は月に1日程度となっている。

表2 調査協力者

	ID	年齢（歳）	性別	家族構成	現在の飲酒頻度	現在の飲酒状況
継続者	A	29	女性	夫	週3日	自宅、飲食店で誰かと
	B	32	女性	夫	ほぼ毎日	自宅ひとり
	C	33	男性	ひとり	ほぼ毎日	自宅ひとり
	D	34	男性	ひとり	週3日	飲食店で誰かと
	E	35	女性	夫、子	週5日	自宅ひとり/夫と、飲食店で誰かと
	F	37	男性	妻、子	週2日	自宅ひとり/誰かと、飲食店で誰かと
中止者	G	30	女性	ひとり	月に2日	自宅ひとり、飲食店で誰かと
	H	32	男性	妻	月に2日	飲食店で誰かと
	I	33	女性	実母	月に1日	自宅で誰かと
	J	34	男性	妻	月に1日	飲食店で誰かと
	K	36	女性	夫	月に1日	飲食店で誰かと
	L	37	女性	ひとり	月に1日	飲食店で誰かと

資料：事前のアンケート調査およびインタビュー調査の内容をふまえ筆者作成。

## 2. 分析方法

本研究で用いる複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach：以下、TEA）は、複線径路等至性モデル（Trajectory Equifinality Modeling：以下、TEM）、発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis：以下、TLMG）、歴史的構造化招待（Historically Structured Inviting：以下、HSI）を統合・統括する考え方である（安田ら，2015）。以下、それぞれの概念について説明する。

まず、TEMでは何らかの分岐が生じている状態・経験を示す「分岐点（BFP）」から、研究者の研究関心事に近い経験を示す「等至点（EFP）」との間の「非可逆的時間」において、協力者がどのような径路（選択肢）をたどったのかを記述していく。径路のなかには多くの人を通るとされる「必須通過点（OPP）」の存在も確認し可視化することで、最終的にはモデルの構成を行っていく。そして、分岐点や等至点では、何らかのせめぎあいや緊張状態が発生していると捉える。分岐点から等至点への歩みを後押しする力を「社会的助勢（SG）」、阻害する力を「社会的方向づけ（SD）」、として把握し意思決定の背景にある要因の存在も理解していく。

分析にあたっては、等至点と対極の意味を持つ「両極化した等至点（P-EFP）」を設定する。これは協力者の発言からは得られず実際には選択しなかった経験である。そこにも目配りし分析することで、見えにくくなっている径路の存在が捉えやすくなる。なお、両極化した等至点（P-EFP）は分析初期においては等至点と対極の意味をもつ内容を仮定するしかないが、分析を通じて当事者の意味づけを反映した内容が設定できるようになることが一種の飽和で、研究の終了を意味する（安田ら，2015）。また、本研究の「等至点（EFP）」としては、継続者は「飲酒が習慣化する」、中止者は「ほとんど飲酒していない」を設定し分析を行った。

次に、TLMGは自己のモデルであり、第1層は行為、第2層は中間、第3層は価値観で構成される。なかでも第1層は、個人の行動や意思が発生するレベルとなっており、TEMで描くことのできる層となる。日常では行動や選択が多くなされるが、そうしたなかで個人の価値観に影響を与えるいくつかのサイン（記号）が発生することで、価値観が形成される。こうした価値観や行為がどのように変容していくのか、人間の内的過程について意識の葛藤や変容のせめぎあいを中間層として設定し描きながら捉える枠組みである。本研究では、若い世代の飲酒に対する評価や印象がどのように意味づけられ、内化し形成されていくのかを捉えるために用いる。

最後に、HSIとは研究者が興味関心を持った現象（等至点：EFP）を実際に経験している実在

する人を招き、話を聞くという対象を選定する理論のことである。個人が経験する事象は生活文脈に依存し個別的であるものではあるが、時間軸として時期区分を限定することで全く同一ではないが類似の経験をカテゴリー化できると捉える。前述した TEM では個人の行動選択や意思決定に関する変化を可視化して捉えることから、こうした類似の経験を等至点 (EFP) として、その経験者を招き迎え話をうかがう (サトウ・安田, 2023)。

---

## 結果

---

分析結果は図 1 の通りである。同図より、若い世代の飲酒経験は大きく 3 つの時期に分けられた。以降、同図で示している構成概念を【 】で示すとともに発言者を前掲表 2 の ID を用いて明示しながら、期ごとに明らかになった結果を説明する。

### 1. I 期：飲酒機会の獲得期

飲酒機会の獲得期とは、初めて飲酒をするまでの時期である。

【20 歳になる (OPP)】を経て、自身が所属するゼミやアルバイト、サークルといったコミュニティの友人から【飲み会に誘われるようになる】。このような状況においては、【過度な飲酒への不安】と【せっかくなら飲酒してみたい】という意識の葛藤が生じる。

具体的には、幼少期において、両親などの身近な飲酒者がいる家庭で育ったことで、「飲酒は場を楽しくするもの (A, F, G, K, L)」や「飲酒への憧れ (A, D, E, F, K)」といった肯定的な印象を抱く一方、「飲酒する両親を心配する (B, D)」状況や、家族の飲酒状況だけではなく CM やドラマ、広告や見知らぬ人が酔っばらっている状況を目にするすることで、「酔っ払いになりたくない (D, G, H, I, K)」や「お酒は体に良くない (A, L)」という否定的な印象も同時に抱き、その結果【飲酒者や飲酒に関する幼少期の嫌な記憶 (SD)】が社会的方向付けとして存在するようになる。また、特に中止者 (G, H, J) においては、所属するコミュニティにおいて年上から飲酒を勧められ断りきれない状況 (【飲酒の勧めを断られない状況 (SD)】) も存在し、こうしたことから【過度な飲酒への不安】が生じるようになる。しかし、20 歳という【飲酒可能な年齢 (SG)】になったこと、そして、飲酒している両親や友人などの【周囲からの飲酒の勧め (SG)】があることで、【せっかくなら飲酒してみたい】という飲酒への興味がわいてくる。その結果、【初めて飲酒する (OPP)】に至り、【人生経験としての飲酒】という価値観を所有することとなる。

なお、実際には経験されなかった径路ではあるが、仮に飲酒への興味ではなく【過度な飲酒への不安】が後押しし選択した経験の存在を仮定した場合、【勧めを断り飲酒しない】が想定される別の径路として位置づけられる。

### 2. II 期：飲酒経験の学習期

飲酒経験の学習期とは、飲酒経験をしながら自分なりに飲酒について理解を深めようとする時期である。

初めて飲酒すると、「普段であれば話せないところまで話を掘り下げたりなど、お酒以外では出せない効果があった (A)」や「お酒があると楽しい雰囲気の中でいろいろと話せて食べて、時間を忘れる (G)」といった発言のように、【飲酒をすると会話が盛り上がる (OPP)】に至る。しかし、初めての飲酒だからこそ【飲酒の仕方がわからない状況 (SD)】において、「先輩に勧められたカシスオレンジを飲んだ (B)」や「その場にあったビールか焼酎を飲んだ (D)」、「サークルやアルバイトの飲み会で同調圧力を感じていた (L)」の発言のように、【相手のペースや酒類、量に合わせて飲酒しなくてはいけない】という意識が芽生える。それに対して、「お酒がきっかけで初対面の人とも仲良くなった (F)」や「お酒を飲んだ方が楽しい。なんでも面白くて笑っちゃう。先輩たちと仲良くなれる機会だと思った (G)」といった発言のように、【周囲に飲酒者が多い環境 (SG)】が【飲酒の場は楽しい】という意識を後押しし、その結果【飲酒を続ける (OPP)】という行為に至る。このように、飲酒を楽しむものとして捉える一方で、飲酒の仕方がわからない状況においては、周囲の飲酒者に合わせるという意識が芽生え、飲酒時には一緒に飲む相手を意識するという【相手を意識した飲酒】という価値観が獲得されるようになる。

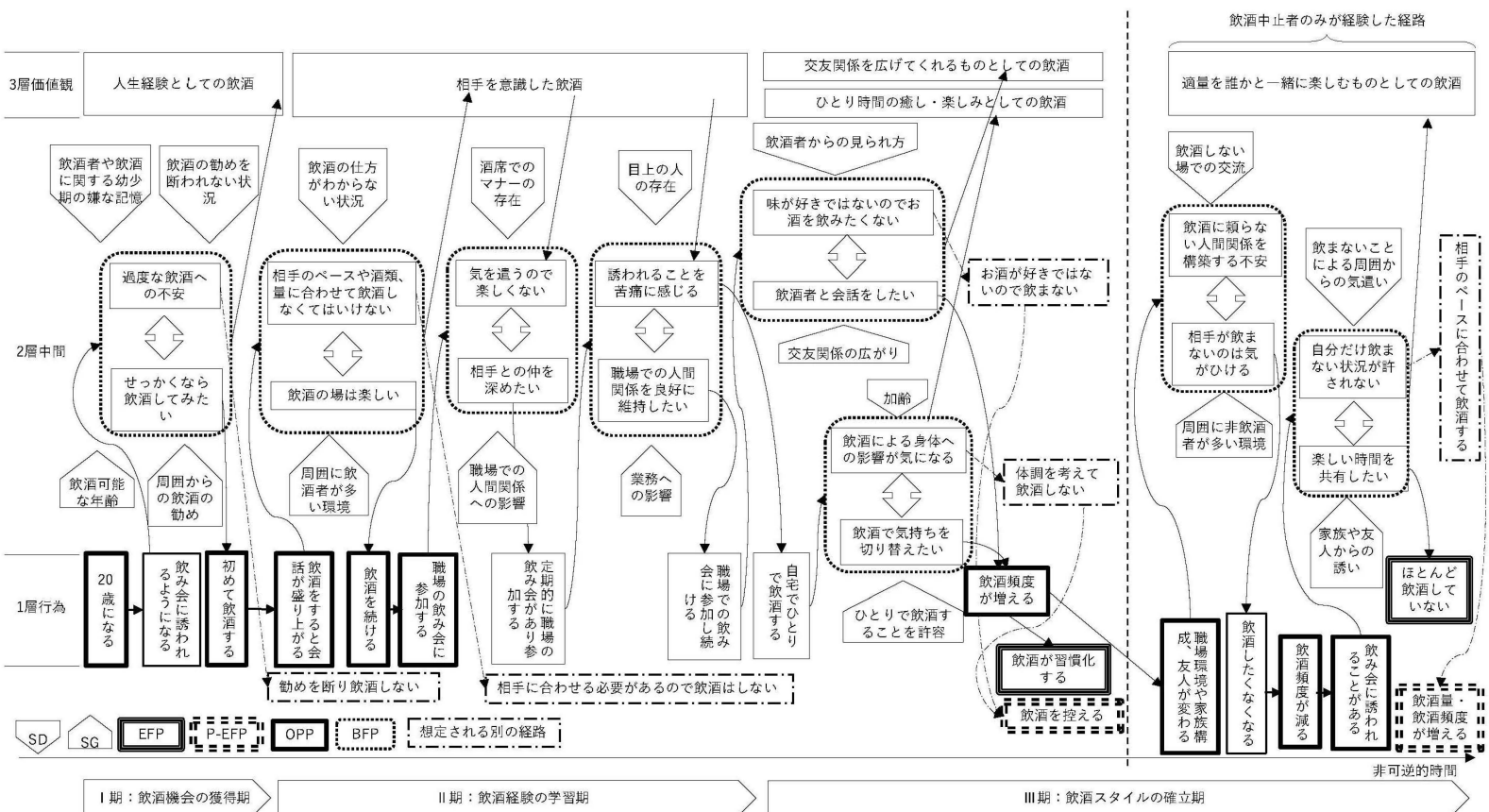


図1 若い世代の飲酒経験とその意味づけに関するプロセス

資料：インタビュー調査より筆者作成。

1) 実線の経路は実際に選択されたもの、点線は実際には選択されなかった経路を示す。

なお、実際には選択されなかった経路ではあるが、仮に飲酒の場の楽しさよりも相手のペースに合わせて飲酒する必要性が次の行為を後押しした場合、【相手に合わせる必要があるので飲酒はしない】という行為を想定することができる。

そして社会人になり、歓迎会など【職場の飲み会に参加する (OPP)】ようになる。【相手に意識した飲酒】という価値観を獲得した状況においては、「酒席の座る位置を事前に伝えたり、料理や飲み物を先に出すようにしたり気配りをしていた (D)」や「目上の人がいるので気を使わない

といけない。お酒を注いだり、楽しくない会話も聞いてあげなくてはいけないので楽しくない(K)」の発言のように、【酒席でのマナーの存在(SD)】という状況下において【気を遣うので楽しくない】という意識を抱く。しかし、前述のⅠ期において【飲酒の場は楽しい】という経験にもあるように、社会人においても、「お酒を通じて仲が良くなかった人ともたくさん話ができる(A)」や「飲酒をすると、その場が楽しめて人間関係を近づけることができる(H)」といった、【職場での人間関係への影響(SG)】から【相手との仲を深めたい】という意識が芽生えるようになる。

こうしたことから、【定期的に職場の飲み会があり参加する】という行為につながり、【業務への影響(SG)】という存在から【職場での人間関係を良好に維持したい】という心情が芽生え、【職場の飲み会に参加し続ける】という経路に至る。「お酒は人とのコミュニケーションが深まるという楽しさがある。上司や同僚の仕事だけでなく、どのように生活しているかなどの違った面も見え、仕事をするときにもスムーズに進んだ(A)」や「会社の飲み会では上司との距離の取り方とか近づき方とかを徐々に探るなど勉強の場でもあったので必要性を感じていた(H)」のように、飲酒することで業務がスムーズになる経験もするようになる。

しかしそうした経路をたどる場合もあれば、「会社の人と飲みに行くことがあったが誘われることが苦痛だった(C)」のように、【相手を意識した飲酒】という価値観のもとでは、上司や役職者などの【目上の人の存在(SD)】により【誘われることを苦痛に感じる】という意識が芽生え、それにより【自宅でひとりで飲酒する】に至る経路も存在するようになる。

### 3. Ⅲ期：飲酒スタイルの確立期

飲酒スタイルの確立期とは、飲酒への理解を経て自分に合った飲酒の仕方を確立するようになる時期である。

ここでは、大きく3つの価値観を所有する経路が確認された。まずは、【交友関係を広げてくれるものとしての飲酒】という価値観である。これは、Ⅱ期において【職場での飲み会に参加し続ける】という行為を経験した場合の経路で、「飲み物としてお酒が好きなのではない(A, D)」や「飲む人と飲まない人への上司の反応の違いを見て、お酒を飲まないことに対してネガティブな気持ちを持つようになった(A)」という発言のように、飲酒者から自分がどう見られているのかを強く意識し(【飲酒者からの見られ方(SD)】)、【味が好きではないのでお酒を飲みたくない】という意識が発生する。その一方で、第Ⅱ期においても感じていた、飲酒することによる【交友関係の広がり(SG)】という存在により【飲酒者と会話をしたい】という気持ちが生まれ、両者の心情がせめぎあい【飲酒頻度が増える(OPP)】、そして【飲酒が習慣化する(EFP)】に至る。なお、実際には経験されなかったものではあるが、仮に好きではないお酒を飲む必要性が次の行為を後押しした場合、【お酒が好きではないので飲まない】という経路を描くことができる。そして、【飲酒を控える(P-EFP)】という行為に至る経路が考えられるが、そこには「お酒が好きではないので飲酒を控えたい」という内容が含意していると理解できたことから、分析を終了した。

次に、【ひとりの時間の癒し・楽しみとしての飲酒】という価値観である。第Ⅱ期において【自宅でひとりで飲酒する】という行為ののちに、【ひとりで飲酒することを許容(SG)】する状況から【飲酒で気持ちを切り替えたい】という気持ちが芽生える。そして、【飲酒頻度が増える】という行為を後押し、【飲酒が習慣化する(EFP)】に至る。「好きなYouTuberが自炊してひとりで飲酒している姿を見てひとりで飲むようになった(B)」や「飲食店ではひとりで飲んでいる人や、上司との飲み会でも好きなものを飲んでいる人もいることに気づき、人に合わせる必要はないなと気づいた。自分の好きなお酒を飲みたいと思うようになった(C)」の発言のように、好きなYouTuberやひとりで飲酒する人を飲食店で見かけるなどの経験をすることで、ひとりで飲酒することを受け入れる様子が読み取れる。また、「仕事で疲れた時に飲むとリラックスやリフレッシュできる(B, C, E, F)」のように、飲酒によって気持ちを切り替えるために高い頻度で飲酒を継続するに至る。なお、その場合においては、【加齢(SD)】という状況から【飲酒による体への影響が気になる】という気持ちが生じる。「年齢とともに飲酒した次の日の体調に影響するようになった(F)」や「健康的なお酒を選ぶようになった(E)」の発言のように、健康への気遣いという点と葛藤しながら飲酒している様子が読み取れる。なお、実際には経験されなかった経路で

はあるが、仮に【飲酒による身体への影響が気になる】という意識が次の行為を後押しした場合においては、【体調を考えて飲酒しない】という行為が想定される。そしてその行為は、【飲酒を控える (P-EFP)】に至る径路を位置づけることができる。つまり、この P-EFP には“体調を考えて飲酒を控えたい”という内容が含意していると理解できたため、分析を終了した。

最後に、【適量を誰かと一緒に楽しむものとしての飲酒】という価値観である。これは、飲酒中止者のみが経験する径路となっている。飲酒中止者は飲酒継続とは異なり、【飲酒頻度が増える】行為が継続されず、「職場や部署が変わった (J, K, L)」や「お酒を飲まない人と一緒にいるようになった (G, I, K)」の発言にもあるように【職場環境や家族構成、友人が変わる (OPP)】という行為を経験するようになる。そして、【周囲に非飲酒者が多い環境 (SG)】により、【相手が飲まないのは気がひける】という意識が芽生えつつも、そうした飲酒しない相手とは、【飲酒しない場での交流 (SD)】という状況が発生しこれまで飲酒により人間関係を構築してきたことに対し【飲酒に頼らない人間関係を構築する不安】が生じる。しかし、「お酒がなくてもお酒を飲んでいた時と同じくらいコミュニケーションできたのでお酒の必要性を感じなくなった (G)」や「飲まないことが日常になるとなくてもいいと思った (K)」の発言のように、【飲酒しなくなる】に至る。その後、【飲酒頻度が減る (OPP)】という行為に至った飲酒中止者は、最終的に【ほとんど飲酒していない (EFP)】に至る。その過程においては、飲酒頻度が減りつつも、【飲み会に誘われることがある (OPP)】という行為を経験するなかで、「私が飲まないと気を遣って友人は飲まないので、飲むようにしている (J)」という発言のように、【飲まないことによる周囲からの気遣い (SD)】が【自分だけ飲まない状況が許されない】という意識を生む。しかし、【家族や友人からの誘い (SG)】があることで、【楽しい時間を共有したい】という意識が芽生え、「お酒は適量であれば害はないと思う。お酒に合わせて友人と行く飲食店を選ぶのは楽しい (J)」や「誘われれば行く。お酒の場が嫌いなわけではない (H)」という発言のように、【ほとんど飲酒していない (EFP)】に至る。その分岐点においては【適量を誰かと一緒に楽しむものとしての飲酒】という価値観を手に入れるようになる。なお、実際には経験されなかった経路ではあるが、仮に【自分だけ飲まない状況が許されない】が次の行為を後押しした場合、【相手のペースに合わせて飲酒する】という行為の選択が想定される。そしてその行為は、【飲酒量・飲酒頻度が増える (P-EFP)】に至る径路を位置づけることができる。したがって、この P-EFP には“相手に合わせて飲酒しなくては行けない”という内容が含意していると理解でき、分析を終了した。

## 考察

飲酒習慣が定着している継続者とその定着がみられない中止者との飲酒経験を比較すると、いずれの属性においても幼少期の飲酒に対する印象は様々であったこと、そして学生時代から社会人時代における友人や同僚との場に飲酒が密接に関わっていたことは共通している。このことは、前掲図 1 の I 期、II 期、そして III 期の前半までが両者の属性で共通して経験する径路となっていくことからわかり、現在の飲酒状況は幼少期や初めて飲酒した際の状況によるものではないことがうかがえる。なお、問題飲酒という視点から若い世代の飲酒行動を分析したこれまでの研究においては、親の飲酒行動が子の飲酒行動に与える影響に関する指摘がなされてきた (Osaki et al, 2009)。しかし、本研究で対象とした一般的な飲酒行動においては、そうした関連性はほとんどみられず、むしろ社会人 (III 期) 以降における生活状況の変化が飲酒習慣の定着に影響を与えることが指摘できる。

そして、飲酒に対する印象や評価はその時々によって変化し、飲酒を継続することで飲酒の意味が創造されていく。はじめは 20 歳という飲酒可能な年齢になることで、それまで飲酒に対し否定的な印象があったとしても興味が生まれ「人生経験として飲酒」が行われる。初めての経験であるために飲酒の仕方がわからず、周囲の飲酒者にベースや内容を合わせるなどの「相手を意識した飲酒」を繰り返すことで飲酒への理解を深めていく。その過程では、飲酒の場の楽しさや人間関係を円滑にしてくれるという評価を抱きながらも、酒席でのマナーや多様な人との関わり

が求められる場においては飲酒相手への気遣いや誘いを苦痛に感じ始める。そうした飲酒に対する葛藤が存在しながらも、交友関係が広がるという飲酒の効果を実感し飲酒を「交友関係を広げてくれるもの」として捉え、たとえば味が好きではなくても飲酒を継続するケースや、ひとりで飲酒することを受け入れ「ひとり時間の癒し・楽しみ」として飲酒を意味づけるケースが存在するようになる。

しかし、現在ほとんど飲酒していない場合はそうした飲酒への意味づけが行われたのちに、「適量を誰かと一緒に楽しむもの」として飲酒を意味づけるようになる。職場環境や家族構成に変化が生じ周囲に非飲酒者が多い状況から飲酒意向がなくなる過程が見受けられた。これまで飲酒の場を通じて交友関係を広げてきた人にとって、飲酒しない場での交流を不安に感じつつも、飲酒の誘いがあれば自分だけ飲まないという選択はされず、ほとんど飲酒しないという選択がとられる様子が見受けられた。

本研究で対象とした30歳前～30歳後半は、転職により職場が変わることや結婚等による家族構成の変化が往々にしてあり、こうした変化が生じやすい年代であるからこそ、その後の飲酒経験にも影響を及ぼし、様々な飲酒状況となっている現状が推察される。そして、現代の日本の若い世代においては、職場だけが優先されるコミュニティではなく、友人や家族、自分だけといったプライベートも同様に重要と捉えながら、自分にあった生活環境を構築していることが本調査よりうかがえた。こうした特徴を有する若い世代の飲酒頻度が増える過程においては交友関係の広がりやひとりで飲酒することを受け入れること、一方で飲酒頻度が減る過程においては非飲酒者との生活が変化として見受けられ、非飲酒者という相手の存在を意識すること、が現在の飲酒状況の違いとしての要因となっている。これまで飲酒という食文化で相手とコミュニケーションをとってきた我々にとって、相手に合わせて飲酒しないという選択がなされている実態が明らかになった。

#### 残された課題

本研究では飲酒経験のある若い世代を対象として、飲酒習慣が定着している場合とそうではない場合の飲酒経験と飲酒に対する意味づけを明らかにした。若い世代のなかでも飲酒経験者のみを分析している点は本研究の限界である。今後は、若い世代以外も対象とすること、そして飲酒経験のない非飲酒者の飲酒に関する経験の分析を行うことにより、本研究で明らかとなったプロセスの検討が求められる。

#### 文献

- A. Tong, P. Sainsbury, and J. Craig(2007). "Consolidated criteria for reporting qualitative research (COREQ): a 32-item checklist for interviews and focus groups." *International Journal for Quality in Health Care*, 19(6), 349-357.
- 早狩瑠子・小川真理子・三崎直子(2015). 妊婦の飲酒実態と飲酒行動要因の分析, *母性衛生*, 55 (4), 813-821.
- 笠巻純一(2012). 大学生の飲酒行動に影響をあたえる要因の検討：大学生 1,211 人に対する質問紙調査の結果から, *学校保健研究*, 54 (4), 330-339.
- 国税庁(2023). 酒のしおり(令和5年6月). <https://www.nta.go.jp/taxes/sake/shiori/gaikyo/shiori/2023/index.htm>, 2023年4月4日閲覧.
- 厚生労働省(2019). 令和元年国民健康・栄養調査報告. <https://www.mhlw.go.jp/content/000711008.pdf>, 2019, 2023年4月4日閲覧.
- 岡田ゆみ(2018). わが国の飲酒効果・動機とその関連要因についての文献レビュー, *日本看護医療学会雑誌*, 20 (2), 45-54.
- Osaki Y, Tanihata T, Ohida H et al(2009). "Decrease in the Prevalence of Adolescent Alcohol Use and its Possible Causes in Japan: Periodical Nationwide Cross-Sectional Surveys, Alcoholism." *Clinical and Experimental Research*. 33 (2), 247-254.
- サトウタツヤ・安田裕子(2023). カタログTEA(複線径路等至性アプローチ)一図で響きあうー, 新曜社
- 山川正信(1991). 女性の飲酒に関する疫学的研究(その3)量頻度指標とライフイベントとの関係からみた女性飲酒の促進要因について, *アルコール研究と薬物依存*, 26 (1), 60-69.
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(2015). ワードマップ TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ, 新曜社